救い主の誕生

ルカ2章11～14節
2020年12月20日
松田 基子 師

この年、2020年は、3月以降、新型コロナウイルス感染拡大を危惧しつつの一年でありました。 教会も感染防止対策を常に心掛けて来ました。 現在、第三波の感染拡大が広島市で憂慮されています。 今のところ、呉市からは、規制が出されていませんので、感染防止対策を行った上で、こうして、会堂に共に集まり、2020年のクリスマス礼拝を献げる事が許されました。

一方、新型コロナウイルス感染重症者、コロナ医療に従事されている方々、生活困窮や様々な困難に見舞われている方々の上に、神様の助けと守りをお祈りいたします。

この様に、今年は、コロナ禍の中、人々の心は暗くなり、沈み勝ちになりました。 色々な問題が起こり、暗いニュースが多くありました。
しかし、この様な時だからこそ、神の御子が人となってこの世に生まれてくださったクリスマスは、光を増し、希望を与えてくれるものです。

今朝は特に、洗礼式を執り行います。
主イエス・キリストを信じ、自分の全存在をキリストに委ねる信仰告白をして、洗礼を受けられます。その中に生まれる前から教会の祈りのなかにあり、教会学校で信仰を育てられた3人がいます。これからの時代を担っていく方々です。 これからの時代は、新型コロナウイルス感染が突然現れたように、何時、何が起こって来るか分からない、想定外のことに見舞われるだろうと言われています。 様々な問題に対処し、乗り越えて行かなければならない時代だと言われています。

しかし、どんな時にも、神様が天地万物を支配し、守っておられること、その神様が人類を愛して、独り子イエス・キリストさえも人類にお与えになった、その大きな愛が、何よりも、この自分に注がれていることを信じ続け、これからの時代を、イエス様を力として、乗り越えて行って頂きたいと思います。

イエス様は、神の御子、真の救い主であられるのに、 この世に誕生された所は、貧しく低きに、家畜小屋でひっそりと、お生まれになりました。

降誕までを振り返りますと、聖霊によって神の御子を宿したマリアと、その事を天使に知らされたヨセフが、共に神様に身を献げ、御心に従う事を決意しました。 神様は、ご自身に従う者を必ず守って下さる、それは2人の確信でした。

ところが、マリアが臨月間近になった時、時の地中海世界の支配者、ローマ帝国の皇帝、アウグストゥスは、属領地から税を洩れなく取り立てるために、住民登録の勅令を出しました。
ルカ福音書の2章3節を見ますと、

「**人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。 ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。 身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。**」

とあります。

ここで、ヨセフが住民登録のためにベツレヘムへ行くと言うのは、

『そこには彼の土地があり、同族の者たちがいたことを意味している。』

と言われています。 ガリラヤの町、ナザレから、ベツレヘムまでは、大人の足で5日路あり、5日間掛かって歩いて行きました。 何もない元気な時ならば、5日くらい、何の支障もなかったことでしょう。 しかし、臨月間近のマリアを連れて、ロバの背に乗ったとしても、旅することは身体的

にも危険に身を曝すことになります。

神様は御自身に従うマリアを、どうしてそのような目に合わされるのでしょうか。 アウグストゥスの勅令は、2人にとって大きな試練でした。
神様は神の御子を宿したマリアにとって、大変な苦労である事はお解りなのに何故、アウグストゥスのその勅令を、お許しになったのだろうかと疑問が湧いてきます。

私たちの人生にも、
『神様を信じ従っているのに、何故こんなに大きな試練が、襲ってくるのだろうか』
と言うことが起こります。 しかし、そこで躓いてはなりません。 神様は私たちが何故、と思う様なことの中に、御自身のご計画を進めておられるのです。

マリアとヨセフは、ベツレヘムで出産を迎えなければならない理由がありました。 旧約聖書のミカ書5章1節からの、
「エフラタのベツレヘムよ、お前はユダの氏族の中でいと小さき者。 お前の中から、わたしのために、イスラエルを治める者が出る。 彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。 まことに、主は彼らを捨ておかれる、産婦が子を産むときまで。 そのとき、彼の兄弟の残りの者は、イスラエルの子らのもとに帰って来る。」
との預言を成就させるために、神様は歴史を動かしておられたのです。

マリアとヨセフの偉さは、すべてが神様の御手の中で導き守られていることを信じて、与えられた情況を呟(つぶや)かず、黙々と従った所にあります。 2人は神様に心から従う、謙遜な、すべてに感謝する人達でしたが、また、貧しくもありました。 多くの人々が住民登録で移動する中で、宿屋と言いますか、民宿をさせて貰うことは出来ませんでした。 当時、貧しい旅人が利用した、家畜小屋に泊めて貰いました。

そこで、マリアは月が満ちて、初めての赤ちゃんを出産しました。 赤ちゃんは産まれると、布にくるまれました。 当時の習慣で、幅の広い包帯状の布で、全身をグルグルに巻いて、固定するのです。 そうすることで、体がしっかりすると考えられていたそうです。

マリアが家畜小屋で出産したとき、産まれて来た赤ちゃんが、神の御子とは誰も知りませんでした。 神様は、こんな重大な出来事を、誰にも知らされないのでしょうか。 良い知らせは、一番愛する者に知らせたいものです。 神様が一番愛し、気にかけておられたのは、誰だったでしょうか。 それは世間一般からは、相手にして貰えない、排除されていた、羊飼い達の中の、1つのグループでした。

8節を見ますと、
「その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。」
とあります。 当時の羊飼いの社会的な身分は低く、ロバ使い、革鞣(かわなめ)し職人、水夫、屠殺(とさつ)人、ラクダ使いなどの、蔑(さげす)まれた職業の一つでした。 彼らは、昼間は牧草地を探し、夜は野獣から羊を守るために、寝ずの番をしなければならないという、とても厳しい仕事をしていました。 しかし、 律法を守って、
『立派な信仰生活をしている』
と自負している人々からは、
『律法を守らないで、神様の祝福が受けられる筈がない。』
と考えられていました。

ところが神様は、そんな人々を常に見守り、愛を注いでおられました。 神様は彼らのもとに、天使を送られました。 9節に、
「すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。」

とあります。 美しい星空が更に輝き、昼間以上の明るさになったことでしょう。 羊飼い達はこれまで経験した事のない光景に、何が起こるのだろうかと、非常に恐れました。

天使は彼らの不安を取り除くために、
「**恐れるな。**」
と言って、
「**わたしは、民全体に与えられる、大きな喜びを告げる。 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。 この方こそ主メシアである。 あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。 これがあなたがたへのしるしである。**」
と告げました。

羊飼いたちは、夢を見ているようでしたが、天使は確かに、
「**救い主がお生まれになった。**」
と言いました。 救い主、それは神様が永いイスラエルの歴史の中に、預言者たちを通して、約束して下さったお方です。 その救い主が、
『預言の通り、ベツレヘムで
お生まれになった』
と言う知らせです。 イスラエルの民であれば、身分の違いなく、すべての民が、この日を待っていました。 それこそ、民全体に与えられる大きな喜びです。

しかし、天使は
「**救い主は布にくるまって、飼い葉桶に寝ている。**」
と言うではありませんか。 この知らせがエルサレム神殿の偉い祭司たちに知らされたなら、彼らは、
「まさか救い主が、そんな所に
産まれる筈がない。」
と一蹴(いっしゅう)したでしょう。

神様は、信仰と真心をお求めになるお方です。羊飼い達は、天使の言葉をそのまま信じました。13節に、
「**すると、突然、この天使に天の大群が加わり、神を賛美して言った。**
『いと高きところには栄光、神にあれ、
地には平和、御心に適う人にあれ。』」
美しい天使の歌声が、夜空一杯に響き渡りました。 家畜小屋の飼い葉桶の中に、布で巻かれて寝ている赤ちゃん。
『その赤ちゃんが生まれたことによって、
神様の栄光は最高に輝く。』
と言うのです。

天地万物を創造し、秩序を与え、全宇宙を支配して、栄光に満ち満ちておられる神様が、この赤ちゃんの誕生によって、さらに御自身の栄光、その素晴らしさを現されると言うのです。
それは何よりもこの赤ちゃんの誕生によって、人類に救いが与えられるからです。

この地上に、真の平和が与えられるのです。それは、神様と罪によって断絶していた関係が回復し、そのことによって、人と人との関係も回復し、真の平和、平安がもたらされるからです。人間の罪からの救いは、この赤ちゃんに懸かっていました。

さて、天使たちが離れ去った野原は、また元の静けさに戻りました。 羊飼いたちが貧しいながらも、清い心で神様を信じ、神様を崇めていたことは、彼らの行動で分かります。 天使たちが離れて、天に去った時、羊飼いたちは、
「**さあ、ベツレヘムへ行こう。 主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか。**」
と信じて立ち上がっています。 彼らは御言葉をそのままそっくり受け取り、信じて従っています。

信仰とは、御言葉を信じて、その道に踏み出すことです。 羊飼い達は、ベツレヘムの村中、

家畜小屋を次々に訪ねて周り、遂に飼い葉桶に寝ている乳飲み子を探し当てました。

　彼らは救い主を見た時に、喜びに溢れました。喜びに溢れると、それを自分の胸にしまって置く事は出来ません。 その一部始終を誰かに伝えずにはいられません。 彼らは直ぐに出かけて行って、人々に話して聞かせました。
すると、18節に、
　「(それを)**聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。**」
だけで、幼子に会うために家畜小屋に行くことはしませんでした。

　救い主に会うこと無しには、真の喜びは与えられないと言う事が分かります。 20節に、
　「**羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。**」
とあります。

　立派な信仰者達からは、
　『だめな者たちだ。』と、
排除されている、自分達のような羊飼いに、
　『神様は、**真っ先に**、救い主の誕生を、**知らせて**下さった。』
その深い愛に、彼らは心が震えました。

　羊飼い達の信仰から、神様の**御心に適う**のは、神様に**信頼**し、**心低く**、神様の御言葉を信じて**従う**人々であることが分かります。

　羊飼いたちは信じて従ったことによって、世界で一番目にクリスマスの祝福を受けることができました。

　今日受洗される方々も、神様に愛されていることを確信して、イエス様を心の内に迎え、イエス様と共に、イエス様を力として、どんな試練も、困難も乗り越えて、生涯、信仰を全うして下さい。

　お祈りをいたします。
私たちを限りなく愛し、常に見守り、導いて下さる天の父なる神様

　コロナ禍の中で、こうして会堂に共に集まり、イエス様のご降誕を喜び、祝うことが出来ましたことを、心から感謝致します。

　私たちも、羊飼い達のように、貧しく低き心をもって、イエス様のご降誕を心から喜び迎え、神様を崇め、賛美する者とならせてください。

　今朝、洗礼を受けられる4人の方々の上に、イエス様がお宿り下さり、その生涯を命の道に導いて下さい。

　救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。